【4-10　SR レポートのまとめ】

CQ7「妊娠・出産のために術後内分泌療法を行わなかった乳癌患者が、一定期間後に内分泌療法を実施することは推奨されるか？」に関し、RCT の報告が 1 編あった。
この RCT の対象は、「妊娠・出産のために」術後内分泌療法を施行しなかった症例ではない。また「早期乳癌で手術、放射線療法、化学療法のいずれかを施行しており、かつ内分泌療法が施行されていない症例で、最終治療後 2 年以上経過した症例」であり、本 CQ と背景は異なる。しかし、内分泌療法未施行例で一定期間後に内分泌療法を実施していることから本 CQ の評価は可能であると判断した。

① 乳癌無病生存期間（DFI）
10 年後解析結果では、全患者（対照 75%、介入 83%、p=0.01）で 有意差を持って、内分泌療法を施行した群で有意な DFI の延長が確認された。またサブグループ解析でも、リンパ節転移陽性例(対照 63%、介入 75%、p=0.008)/ER 陽性例( 対照 73%、介入 84%、P=0.01)/PR 陽性例( 対照 71%、介入 82%、P=0.01)で有意差を持って、内分泌療法を施行した群で有意な DFI の延長が確認された。よって、一定期間後の内分泌療法は「益」と考えられる。
② 乳癌生存期間（OS）
10 年後の解析結果では、全患者では OS に有意差は見られず。ただし、サブグループ解析ではリンパ節転移陽性例( 対照 66%、介入 80%、p=0.02)/ER 陽性例(対照 73%、介入 87%、P=0.001)/PR 陽性例( 対照 73%、介入 86%、P=0.0001) で有意差を持って、内分泌療法を施行した群で有意な OS の延長が確認された。現在では ER/PR 陽性例にのみ内分泌療法を行うことを考慮すると、一定期間後の内分泌療法「益」となる可能性が考えられる。